

宮崎女子短期大学紀要 第25号 17~41頁

悪と神

大 塚 稔

Evil and God

Minoru OTSUKA

アウグスティヌスと惡

惡の問題は、伝統的なキリスト教的有神論に鋭い矛盾を突きつけてきた。惡の存在と全能なる神をいかに理論的に矛盾なく処理できるか。これはキリスト教神学の大きな課題の一つであった。とりわけアウグスティヌスの場合には、自虐的な体験の解決を求めて、一種異様とも言えるほどの苦痛を与えた。彼はその解決を求めて、結局、膨大な著作を書き残すことになる。果たして惡の存在と神の全能とはどのように考えることによって、その解決を図ったのだろうか。またその解釈は神学に何をもたらしたか。それを粗描するのが本稿の目的である。

I 救済と理論

神の問題は、古来より、信仰と哲学的知恵との間で板挟みになってきた。啓示と理性との衝突である。一方では、信仰は人間存在に体験的に関わる問題であって、これに理論的な返答を与えても大した意味はないと主張され、更には神の神秘を冒瀆することですらあると言われてきた。確かに何らの信仰心のないような宗教はありえない。しかし他方では、神の正義や存在証明を巡り盛んな論議もなされてきた。なかでも、惡の存在と神の全能とは巧みな弁神論を生み出す契機ともなった。これは、神の問題が単に信仰上の事柄にとどまらず、理論上においても教父たちや哲学者たちを鋭く悩ませずにはおかぬ問題であったことを意味している。

アウグスティヌスが青年時代に惡の問題に悩まされたことはよく知られている。一般にはアウグスティヌスは惡の解決を求めて十九歳でマニ教に入信したと言われる。しかしそのような彼の入信の経緯については、山田晶氏のように、むしろ事情は逆であって、

「マニ教の信仰生活の中で彼の心の奥底から、惡の問題は生じたのである。それも理論上の問題としてではなく、むしろ体験に即した問題として生じてきたもの」であって⁽¹⁾、「惡の問題は、単に惡の本質の問につくるものではなく、それは同時に惡からいかにして救われるかという救済の問題であった。しかも彼の場合、惡の問題はこの二つの問をいわば並存的に包含したものではなくて、それは根源的に救済の問題であった」⁽²⁾

という主張もある⁽³⁾。彼は言う。

「悪の問題の解決とは、アウグスティヌスにとって、<悪>なるものの定義を求めるこではなく、悪の苦しみから救われることによって成就されるものであり、たとえ本質が問われるにしても、それを定義することは何らかの仕方で救いに役立つものでなければならない<中略>。彼は単なる信仰にあきたらず、知を求めて欺かれ、かえってそれによって「信仰の効用」に気づくのである。アウグスティヌスを苦しめたのは、悪の問題ではなく、悪そのものであった」⁽⁴⁾と。

しかしどうだろうか。果たしてアウグスティヌスの場合には、理論と実存論的 requirement <救済>とは並存していないと言い切れるのだろうか。入信の経緯も、事情は逆なのだろうか。

アウグスティヌスはしばしばイザヤ書7・9「君たちは信じなければ知解することはない」を例に信仰を強調する。確かに信ずるとは、存在するすべてのものが唯一の神によって存在すること、神は在りて在るものであって、被造物は在らしめられて在るものだと信ずることである。また悪に因んで言えば、神は悪（罪）の創造者ではないと信ずることもある⁽⁵⁾。しかしアウグスティヌスはそのすぐ後で、罪は神よってつくられた魂から生じ、その魂は神によって存在するのだとすると、どうして罪は直ちに神にたどらないのか、この問題が心を悩ますのであると述べている。つまり善なる神が罪の原因であったり、神が即悪であったりしてはならない理由に苦慮するのである。どうしてという問いは、明らかに理論を含んでいる⁽⁶⁾。

そして彼は、罪とは、「正義が禁じており、それを差し控えることが自由であるものを、保有したり追い求めたりする意志⁽⁷⁾のことである⁽⁸⁾」とした上で、悪を倫理的な罪に還元し、罪を自由意志に還元する。罪とは自由意志の悪用に他ならない。従って神には罪はないし、神が罪の原因でもない。

この理論の経緯は、体験に基づいたものとは言え、体験そのものではない。つまり心を悩ますとは、単に自責の念に苦しむという体験を意味するわけではないし、また救いに役立つための理論をただ模索するという意味でもない。アウグスティヌスも理論は理論として自足する必要を感じていたはずである。彼が高名なマニ教徒ファウストゥスに望んだのも明らかに知的満足であった。でなければ、たとえ不本意にせよ、アウグスティヌスは、マニ教とも、アカデミア派とも、ドナトゥスとも、ペラギウスとも論争する必要など全くなかったであろう。まして『再考録』2巻など不要ではなかつたろうか。もっともこれは、アウグスティヌスがアクィナスのような体系的な思想家だったという意味では決してない。

またもしそれをただアウグスティヌス一個の問題として、単に救いを求めただけのものであるとすれば、その後の弁神論はすべて虚妄な理論の集積になりかねない。これは、アウグスティヌス個人の解釈がどれほど後世のキリスト教徒や哲学者たちを悩ませたかの事実を軽視している。

アウグスティヌスが「知を求めて欺かれた」のは事実だとしても、だからと言って直ちに彼が「信仰の効用」に気づいたと言うのはどうだろうか。事情は逆ではなく、むしろ並存したものと考えるべきではないだろうか。つまり体験に即した救済の requirement <実存論的 requirement> と理論の充足性とを求める要求とは同時進行の形で進んでいると考えるべきではないのだろうか。アウグスティヌスははっきりと次のように述べている。

「僕が、子供の時から両親によって植え付けられた宗教を軽蔑して、9年間もあの人々に従い、

かつあの人々の言うことに熱心に耳を傾けざるをえなかったのは、彼らが、僕たちは迷信におそれ従い、理性以前に信仰をもつように命じている。しかし自分たちはあらかじめ真理について論議し、これを明らかにするのでなければ、誰一人として信仰を押しつけるようなことはしない、と言っていたということ以外にどんな理由があったであろうか。誰がこれらの約束に誘惑されないであろうか。ことに青年時代から真実なものを求める心をもち、学校で何人かの学識ある人々と論争することによって傲慢になり、またお喋りになった者で、誰がこれらの約束に誘惑されないだろうか。彼らが僕に出会ったのは、僕がちょうどこういう状態にいる時期だった」と⁽⁹⁾。

これを読む限り、悪の問題が「理論上の問題としてではなく、体験上の問題として生じた」という指摘には無理がある。また「マニ教の信仰生活の中で彼の心の奥底から、悪の問題は生じた」とするのも、軽率である。彼が、キケロの哲学入門『ホルテンシウス』⁽¹⁰⁾ を読んだのは、十九歳の時である⁽¹¹⁾。これによって彼は既に哲学の知恵に目覚めている。マニ教への入信はアウグスティヌスの言葉を信じてよいのなら、その後のことである⁽¹²⁾。『ホルテンシウス』への唯一の不満はそこにキリストの名が見当たらないことであったと言う⁽¹³⁾。素人の判断が許されるなら、マニ教への入信は、そのキリストへの合理的解釈を求めたものであったのではなかろうか。

アウグスティヌスは肉欲にからむ悪の体験に自虐的なまでの自責の念を感じつつ、その自責の念の合理的解決を求めてマニ教に入信した。しかしまニ教的解決では根本的な救済にはならなかつた。彼は更に充全な理論を求めて思索を重ねる中で、アカデミア派の懷疑論を克服し、アンブロシウスの比喩的な聖書解釈に触れた。そしてプロティノスの善<悪を存在の欠如とする>解釈に出会い、「これ、よめ、これ、よめ」⁽¹⁴⁾ という子供たちの声を聞き、最初に開いた頁のパウロの言葉⁽¹⁵⁾ に安心の光を見出した。こうして彼は新たにキリスト教徒への道を歩みはじめるのである。これは単に救済を求める旅ではなかつた。

しかしいずれにせよ彼は結果として膨大な文書を書き残した。また彼がマニ教入信以前に自責の念を抱いて苦悩していた背後には一種の唯物論的思考があつたろうし、肉欲が悪だとする暗黙の倫理的規範<キリスト教的禁欲思想>もあつたはずである。また晩年に至つて『再考録』2巻を書く執念は、理論の充足性への強い意欲を感じさせる⁽¹⁶⁾。確かに晩年には神の恩寵が強調され、自由意志までもが原罪の前にその意味を失いかねない状況にはなるが、しかしそれが理論の充足性への欲求であることに変わりはない。彼は決してトマスのような体系家ではない。しかし信仰のみを求めた單なる神父でもない。

アウグスティヌスは、『真なる宗教』第4部24において、「権威は信仰を要請し、人間を理性へと準備する。理性は理解と認識へと導く。とは言え、理性は、誰が信ぜられるべきであるかを考える時、権威を完全に捨ててしまうわけではない」と述べ、権威が理性に優先すると述べている。しかしそれは明らかに、理性を軽視したものでない。また「真の宗教は、まず信じ、その後、信じたことを会得かつ理解する⁽¹⁷⁾ という仕方ではければ、決して正しくその人の中にはいることはできない」<『信の効用』第2章第3節>とも言われるが、信じることが单なる軽信でないことは、アウグスティヌス自身が述べている通りである。すなわち、「すべて理解する者は信じてもいるし、また全て憶測する者も信じている。だが信じる者は必ずしも理解しない。憶測する者は決して理解しない」⁽¹⁸⁾ のだと。

そして宗教においては、次の二種類の人々が賞賛に値する人々だと述べ、次のような説明を与えている。第一の種類の人々とは、既に＜真理＞を発見した人々で、こういう人々を至福の状態にいる者と言う。第二の種類の人々とは、＜真理＞を非常な熱意をもって、かつ最も正しい方法で求められる人々である⁽¹⁹⁾。アウグスティヌス自身は、おそらく自分を第二の種類の人々の中に含めているにちがいない。なぜならこの第二の種類の人々も、いずれかならず真理に至ると信じているからである⁽²⁰⁾。

彼にとり、権威と理性とは知恵を学ぶ二つの強い力であった。キリストの権威を離れず、理性によって究められるべき事柄は探究し続ける⁽²¹⁾。それは、彼が切望した「神と魂について知ること」⁽²²⁾に他ならない。果たして彼は真理に至ったのだろうか。この問いは、体験の問題が理論と並存していることを前提にしている。

彼の意図を真に継承するためには、彼自身がその時代の思想を吟味したように、我々も同じように彼自身の理論を吟味しなければならない。彼の引き出した結論が果たして理論として充全なものであったかどうか。もしその理論に問題があるとすれば、現代に生きる我々には、マニ教的な欺きの知恵ではなく論理的に整合的な知恵を求める必要がある。

しかし理論的な問題に専心することは、悪を実際に克服するエネルギーを消耗させることに繋がり、結果としてはそれはただ悪を増していることになるというような批判もある。これについては、グリフィンも『神、力、悪』の序文において同種の問題提起をしている。彼はこれに以下の様な返答を与えた。

「悪の問題が純粹に人間存在に関わる実際上の問題であるというのは間違っている。なぜなら我々人間が経験している途方もないほどの悪は我々が持っている思想と感情によって更に悪くさせられているからである。また人々が悪の問題を取り上げる場合、常に暗黙のうちに理論を肯定しているからである。例えばなぜ神はこのようなことを生じさせたのかという問いには、神は生起する全てのものの原因であるという信念が隠されている。従ってもし人間の理論上の信念が、人間の悪の経験に深い関わりがあるとすれば、悪を克服する努力から理論上の吟味を除外することはできない。理論上の問題は理論上で解決されるべきである」と。

筆者も同意見である。問い合わせたは仮説が観察に先行しなければならない。期待つまり反応への性向が、全ての観察に、そして全ての知覚に、先行しなければならない。これは、伝統的な科学の帰納主義的考え方に対する批判として、ポパーが提出した二つのテーゼである。もし理論が、ポパーの言うように、観察に先行するものであるとすれば、具体的な実際的問題に理論が先行すると考えることも可能である。ポパーは『客観的知識』第7章「進化と知識の木」において、「貧困と闘うために何をなしうるか」という実際的問題は、「なぜ人々は貧しいのか」という純粹に理論的な問題を導いたし、ここから賃金や価格の理論等々の理論経済学を生むに至ったと述べている。グリフィンの恩師でもあるチャールズ・ハーツホーンもまた、『完全性の論理』第9章「科学、不安、永遠の宝」において、「心の平安は、具体的な状態においてよりも、諸々の原理となる考え方のうちにより多く見出される」としている。「未来の危険性や曖昧さに勇気と希望を持って直面できるような観念や理想のうちに」心の平安はあると言うのである。

アウグスティヌスの苦悩は、確かに自らの体験に基づくものだが、体験そのものが苦悩を引き出しているわけではない。体験は苦悩の契機であって、実際は無意識的であるにせよ、意識的である

にせよ、体験に先行する観念（罪悪感）と現在の観念との衝突が苦悩を生むのである。彼はまさに体験の意味づけに苦しんでいると考えられる。それを解決するには、少なくとも祈りと並行した理論的な解決が必要である。

II 善の欠如

悪の問題が、まだ青年であったアウグスティヌスを非常に苦しめた問題であった⁽²³⁾ことは既に触れた。しかし彼が苦しみ抜いた揚げ句に引き出した一つの結論は、その後の弁神論に決定的な方向づけを与えた。いわゆる悪を「善の欠如」と見る解釈である。『告白録』第3巻第7章にはそれが次のように記されている。「惡なるものはつきつめてゆけば完全な無になってしまふな、善の欠如にはかならない」と。そして「存在するものは、それが存在するかぎり善である」<『眞の宗教』308頁>というプロティノス的な存在理解に至った⁽²⁴⁾。これによって彼は、マニ教的二元論を脱したと言われている。

マニ教は周知のように二元論を基盤にした教義を展開した⁽²⁵⁾。『フォルトゥナトウス駁論』19には、

「全能なる神は、自分の内からはいかなる悪を生み出すことをせず、神に属するものは一つの不可侵なる泉から発し生まれたものとして、不壞のままである。しかるにこの世に住む他の対立物は、神からでたものでもなく、神を創造主としてこの世に現れたものでもない。すなわち神からその起源を得たものではない。悪は神とは無縁である」とある。

悪は、神が産んだものでも、つくったものでもなく、引き出したものでも、投げ出したものでもなく、それ自身の生命と、独自の支配領域と原理とを持っている<『眞なる宗教』9, 304頁>。

また同書18において、フォルトゥナトウスは、

「私は二つの実体があったと主張する。われわれが先に述べたように、光の実体のうちには、不滅なる神があり、他方には、対立する闇の本性がある」

とも述べている。いわゆる闇と光が対立する二元論的世界觀である。悪が事実存在するとすれば、全能の神は悪をも創造したことになり、神の全能が汚されるというのがマニ教的二元論の基底にある。

しかし神から悪を救うために、悪は神とは独立に存在すると言えば、逆に万物を無から創造した神の全能に鋭く対立する。悪を独立した自存の実体と見る限り、神の力が及ばないものが存在するという点で、神の力が制限されることになるからである。マニ教徒は言う。

「あなたがたが聞き従わないのは、神から来たものではないからである」<ヨハネ8・48>。

「あなたがたは自分たちの父、すなわち悪魔から出てきたものである」<ヨハネ8・44>と。

しかしアウグスティヌスは、

「すべてのものは彼によってできた。彼によらないでできたものは何もなかった」<ヨハネ1・3>。万物がそこから出て、それによって成り、そこへ帰するかたに栄光があるようによく<ロマ書11・36>」

と言い返す。神はどこまでも万物の創造者でなければならない。そして「神から来たものではない」という言葉に、彼は次のような解釈を施す。

「悪人を非難する場合には、あなたがたは神からの者ではないというのが正しいのだと。なぜなら我々は彼らを、真理にそむく者、不信仰な者、極悪人、破廉恥漢、また全部をひとまとめに罪人と呼ぶが、これらがみな、神からの者ではないことを誰が疑うであろうか」と<『二つの魂』第7章>。

これには、悪を倫理的な悪に、つまり罪に、還元することが含まれており、自由意志による善の悪用と見るアウグスティヌスの立場の一面がよくあらわされている。この場合、罪とは、悪しき本性への欲求ではなく、より善いものの廃棄を意味する。行為それ自身が悪であること、従ってここに挙げられた罪人たちが悪だと言うわけではない。罪人が悪しく用いた本性が悪なのである⁽²⁶⁾。これを善の悪用と呼んでいる。外的悪や恩寵論を離れて考えれば、悪と呼ばれるのは、我々の自由意志に基づく罪だけなのである⁽²⁷⁾。彼にとって「あらゆる悪の根はむさぼりである」⁽²⁸⁾という聖書の言葉ほど真実なものはない。むさぼりとは、十分以上のものを欲することであって、十分とは、それぞれの本性が自らを保つに必要な限度である⁽²⁹⁾。「外的な人間は日々朽ち果てるが、内的な人間は日々新たにされる」⁽³⁰⁾。

確かに悪が罪であるとしても、このような罪が悪のすべてではありえない。彼は、罪を含む悪一般を一体どのように考えていたのだろうか。「悪なるものはつきつめてゆけば完全な無になってしまふな、善の欠如にほかならない」とはどういうことか。また「存在するものは、それが存在するかぎり善である」⁽³¹⁾とはどういう意味なのか。

III 悪と壞敗と無

アウグスティヌスによれば、悪とは壞敗<corruptio>であると言われる。例えば知識のある魂の壞敗は無知と呼ばれ、勇気のある魂の壞敗は臆病と呼ばれ、健康の壞敗は病氣と呼ばれる。物質について言えば、美しさの壞敗は醜さと呼ばれ、秩序の壞敗は乱雜、完全性の壞敗は分離とか分裂とか減少とかと呼ばれる⁽³²⁾。これは、要するに、有形無形のあらゆる被造物の自然本性的な限度や形象や秩序が壞敗されることを意味している。

限度<mensura=modus=unitas>とは、諸物の時間空間的限界をさし、それぞれの形相を受容する能力のことである⁽³³⁾。一般的には、あらゆるものは、それぞれの固有の限度<基準、きまり>を持っており、それぞれの限度に応じて存在を受け取り、それぞれのものとして存在すると言われ、過不足いずれにせよ、この限度をはずれると正しいあり方をしていないと見なされる⁽³⁴⁾。物体を含むあらゆる被造物は、その限度と形象と秩序に応じて、神によって創造されているからである⁽³⁵⁾。

形象<numerus=species>とは、諸物の中に実現されている形相のことであって、諸物の完全性を言う。形象<numerus>には、これ以外に、例えば、(1)数学的対象である「数」<数とは、いわゆる点、長さ、幅、高さを、1, 2, 3, 4に対応させられるもので、形象とは本来この数概念から由来している>としてのnumerus, (2)音楽や詩における「リズム」としてのnumerus, (3)宇宙、および人間における調和としてのnumerus, (4)神においては、数学的法則、リズムの美、宇宙および人間のあらゆる調和を潜在的に含む「一性」の充溢としてのnumerusなどがある⁽³⁶⁾。

秩序<ordo>とは、全体の中での諸物の位置づけ、あるべき目標をさし、これによって全体の調和と善が成るもののことである⁽³⁷⁾。

このような限度や形象や秩序が壊敗されることが悪だとすれば、例えば、悪しき限度とは、なすべきことを充分になさなかったり、なすべき以上に余分になしたり、不適切になしたり、なすべきでないようなことをなすこと、言い換えれば善き限度によって<適度に>なさないことが、悪しき限度と言われるし、また人が悪しき限度によって<限度をわきまえずに>なしたと非難されるのは、まさに限度が保たれていなかったからであるということになる。

悪しき形象とは、よりきれいな、より美しいものとの比較によって、その度合いの低いもの、小さいものが悪しき形象と言われる。例えば、人間の形姿と猿の形姿を比較して、前者はその美が大きく、後者はその美が小さいと言われる⁽³⁸⁾。美が小さいとは猿で言えば、猿が人間より醜いことを意味している。アウグスティヌスはまた、「浴場の人間が裸でいるのは当然だか、広場を歩く人間が裸ではいるのは不適切だ」という例を挙げている⁽³⁹⁾が、これは形象の不適合、不一致のことである。同様に悪しき秩序とは、その秩序がより小さく保たれている場合に、あるべき秩序以下であつたり、ちょうど相応しいような秩序がなかつたりする場合、悪い秩序と言われる。つまり無秩序が悪なのである。壊敗とは、被造物がそれぞれの段階に応じて持っている自然本性の不適合、不調和、減少に他ならない。

例えば、存在と非存在の中間に動物の身体を置き、この身体がある母体に形成され、生まれ、成長し、美しく、頑強に育てられる場合、そしてそれが維持され安定している場合、これは明らかに存在の充実という方向に向かっていると言えるし、逆に老齢期を向かえ、そのすべての状態が弱まり、勢力が衰え、力が弱くなり、形は醜くなり、肢体の結合はこわれ、諸部分の調和は崩壊し、ますます壊敗の度を増せば増すほど、ますます破滅に向かっていると言える。結局、壊敗とは、破滅に向かう運動⁽⁴⁰⁾、何らかの「欠け<defectus>をもつ消極的な運動」⁽⁴¹⁾だと言えそうである。

しかしこのような壊敗は一体何に由来するのだろうか。アウグスティヌスは、

「どこから壊敗が由来するのかをたずねるものに対しては、壊敗しうるこれらの本性は、神から生まれたものではなく、神によって無からつくられたのだというが、そのきわめて簡潔な返答である」⁽⁴²⁾と述べている。

つまり壊敗によって、滅びるべきものから、あらゆる限度、形象、秩序が取り去られると、いかなる存在も残らない⁽⁴³⁾からである。「欠けをもつ運動」が悪だと言われるのも、それがこのような無に由来するからである⁽⁴⁴⁾。

「限度と数<形象>と秩序を持つものを見たら、躊躇せずにそれら全てを制作者たる神に帰さねばならない。しかしそうせずに、限度と数と秩序だけをそこから取り除こうとすると、そこには何も残らない。<中略>。神によらないで存在するものは何もない」⁽⁴⁵⁾。

「彼によらないで造られたものは何も無い」という意味は、無が積極的な何かであるという意味ではない。例えばそれは、何も持っていない<I have nothing>という意味が、無を持っていることではないのと同様である。無は実体ではないという考え方によって、アウグスティヌスは死の恐怖⁽⁴⁶⁾から思想的に救われようとしている。

壊敗とは、限度、形象、秩序の壊敗であり、それは欠けを持つ消極的な運動であった。欠けを持つ消極的な運動とは、無に由来する破滅に向かう運動でもあった。惡が罪だと言われるのは、この欠けが人間の倫理的破滅への運動⁽⁴⁷⁾でもあるからである。しかし言うまでもなく、壊敗そのものは神のわざではない。壊敗は、その本性が無から造られた被造物の限度や形象や秩序に対する、あ

るいは魂に対する報いのために、神の権能によって置かれているからである⁽⁴⁸⁾。

従って壊敗や欠けは、無から創造された被造物の在らしめられて在る存在そのものの原罪とも言える。

「私の魂が、万物をこえながら、しかも万物がそれなしには無であるあなたを目ざして、万物を投げ捨ててもかい、向かうことによって傷を癒されるためでした」⁽⁴⁹⁾。「ものは質料から生ずるが、その質料自身、創造主によって無から存在せしめられるのであるから」⁽⁵⁰⁾。

IV 悪と変化

壊敗が欠けを持つ運動であり、その運動が破滅や減少、分裂や破壊を意味するのだとすれば、変化するものは全て何らかの壊敗を伴うと考えられる。なぜならすべての変化は、それまであったものはないものにするからである⁽⁵¹⁾。従って、もし壊敗が欠けをもつ運動であって悪と言えるなら、同様に変化もまた悪でなければならない。変化するもの、つまり可変的なものは、不变的なものより劣ったものであり、かつ悪の象徴でもあるという考え方は、善の欠如の概念がそうであるようにプラトン以来の伝統である⁽⁵²⁾。死に向かい一つある肉体の醜悪な変化は、どう見ても善とは言い難い。しかし変化をこのように、消極的、下降的に見る捉え方がその後の西洋思想を大きく特徴づけることになる。なぜならそれが、感覚よりも理性を優位に置く認識論に結びつくからである。哲学者とは、魂を肉体からできるだけ解放しようとする者のことであった⁽⁵³⁾。

プロティヌスの影響を受けたアウグスティヌスも、やはり感覚を軽視している。

「触覚や視覚やあるいは他の仕方で身体的に感覚されるものは全て、感覚が知性に劣るように、知性によって把握されるものに劣る」⁽⁵⁴⁾。

「可知的なもの、つまり知性認識の対象は何であれ、あらゆる可感的なものに勝る」⁽⁵⁵⁾。

更には、

「君に命じることができることはただ一つしかない。それ以上のことは私は何も知らない。すなわち、私たちがこの身体を持ち廻っている限り、私たちの翼がとりもののような感覚的なものによって妨害されないように、あの感覚的なもの＜『再考録』において、あのとは、消滅可能なものを意味すると補足している＞はすっかり遠ざけて、大いに用心しなければならないのだ。なぜなら、私たちがこの世の暗闇から抜け出してあの世の光へ向かって天翔けるには無償の完全な翼が必要だからである。思うに、この身体という洞窟の中に閉じ込められている人間には、彼らがあの感覚的なものを粉々にするか、あるいはばらばらにするかして自分の天上の世界へ昇ることができるような人になるのでない限り、かの光は決して自分を啓示しようとはしないであろう。そういうわけで、いつの日にか君が地上の何ものにも心を惹かれないような人になった時、その瞬間、その時刻にこそ、君の求めていたものを君は見ることになるであろう」⁽⁵⁶⁾。

とまで述べている。一切の感覚を離れ、天上に眼を向けること、そして洞窟を抜け出て太陽を見るなどを切実に訴える。

しかしときなり太陽を見ることはできない。これには眼を慣らして行く必要がある。まず衣服とか壁などの、自分では光らないが、光を受けて見られるもの。次に金や銀のように、太陽の光を受

けて光るもの。そして地上の火を、更には星、月、暁の光と日の出の光、最後に最終目的である太陽を見る。こうすれば、最初には直視できなかった太陽も直視できるようになると言う⁽⁵⁷⁾。この太陽とは、プラトン流に言えば、善のイデアであり、アウグスティヌスにおいては神そのものである。一定の秩序にしたがって知恵に到達することが、すぐれた学問のなすべき努めなのである⁽⁵⁸⁾。

アウグスティヌスの眼は、確かに魂と神に向かっている。それは、不滅なもの、永遠なものを見つめる眼である。魂と神との接点を求める眼であった。しかしこの眼は、同時に神以外の全てを可変的なものと見る教父アウグスティヌスの眼でもある。全能なる神の前では、理性も魂も可変性を免れない。

「君は、物体が可変的であることを知っている。また身体を生かす生命自身も、その様々な現われ<affectus>のゆえに明らかに可変性を欠いてはいない。また理性自身ですらも、真理に至る努力をある場合はなし、ある場合にはなさず、あるいは、ある時は真理に達し、ある時は真理に達しないということで、可変的たることを十分に示している」⁽⁵⁹⁾。

また同書<『自由意志』>第2巻第17章<訳書127頁>には、

「可変的なものはみな、必ず形を持ちうるものもある。我々は変化されうるものを受け入れるもの（可変的なもの）と呼ぶように、形づくられうるものを受け入れるものと呼ぶ。しかしどんなものも自分自身で形を与えることはできない。なぜなら、どんなものも自分の持たないものを自分に与えることはできないからである。そして、あるものが形を持つということは、それが形づくられるということである。従って、すでに形を持つものは何でも、その持つものを受け取る必要はない。しかし持たないとすると、持たないものを自分から受け取ることはできない。それゆえ、今いったように、何ものも自分で形づくることはできないのである。魂と身体の可変性についてはこれ以上言うべきことがあるだろうか。魂も身体も、ある不变で常にあり続ける形相によって形づくられる」。

理性や魂が可変的なものと見られる理由については、上述のことから明らかである。それは、可感的対象がそうであるように、理性や魂も、自らを自分自身によって生み出せないからである。被造物全てが可変的だというのはそういう意味である。これは魂を神にまで高めること⁽⁶⁰⁾でもなければ、理性を神とするものでもない。むしろ魂の視覚と言われる理性に、自己の最終目的である神への直観に思い至らせることを意味する。『ソリロキア』第1巻6章13<訳書352>にはこうある。

「魂の視覚とは理性である。しかし視ているすべての眼が見ているのだということにはならないのであるから、正しい完全な視覚、すなわちその後に直観が続く視覚は眼のすぐれた能力とよばれる。すぐれた能力とは、正しい、または完全な理性だからである。しかるに視覚そのものもまた、あの三つのものがたえず付き添っていなければ、たとえ健康な眼を既に持っていても、その眼を光の方へ向き変えさせることはできないのだ。つまり、視覚の向けられるべき対象が、これを見た視覚を至福にするという事情になっていると視覚に信じさせる信仰と、視覚がちゃんと視ていれば、見るように必ずなるという期待を視覚に抱かせる希望と、見て楽しみたいという憧憬を視覚に起こさせる愛と、この三つのものである。このような視覚によってこそ、視覚の終局である神への直観が得られる」と。

詩篇<102・27-28>の次の言葉は、そのような視覚を持った魂の内なる知性によって信じ、希望され、愛されるべき永遠不滅の対象が何であるかを伝えている。神は全能かつ不变である。

「かつてあなたは大地の基を据え、御手を持って天を造られました。それらが滅びることはあるでしょう。しかしながらあなたは永らえられます。全ては衣のように朽ち果てます。着るもののようにあなたが取り替えられると全ては替えられてしまいます。しかしながらあなたが変わることはありません。あなたの歳月は終わることがありません」。

V 悪と善

これまで、悪とは何であるかを中心に考えてきた。しかしこれは悪という実体があつて、その前提に立って論じたものではない。むしろ論議の示すところは逆であった。悪とは壊敗であり、一種の欠損運動<motus defectivus>であった。それは、積極的、肯定的な運動ではなかった。従つてその由来も、無に帰された。とすれば、アウグスティヌスの論議によれば、我々は実体のない悪についてあれこれ論じてきたことになる。アウグスティヌスが実体と見なすものを考えなければならない。つまり善とは何であり、善の欠如とは何を意味するのかを考えることである。それは同時に悪を善の観点から改めて捉え直すことでもある。

アウグスティヌスによれば、「悪なるものは突き詰めていけば完全な無になってしまうような、善の欠如である」とされた。これは文字通り、悪は善の欠如であるという意味である。なぜ悪が善の欠如と言われるのか。それは、「存在するものは存在する限りにおいて善である」とされるからである。なぜ存在するものは全て善なのか。それは最高善である神が被造物の一切を無から創造されたためである。アウグスティヌスは『告白』⁽⁶¹⁾において、次のように述べた。

「滅びるものもやはり善いものなのである。もちろんそれは、最高の善ならば滅びるはずもありませんが、いくらかでも善いものでないとしたら、滅びることすらできないでしょう。もし最高の善であるとしたら不滅であったでしょうし、いかなる善でもないとしたら、それらのうちには、滅びるべき何ものも含まれていないことになるでしょうから。というのは、滅ぼすとはそこなうことですが、そこなうことはそのものの有する善をへらすことなしにはおこりません。それゆえ滅ぼしても何もそこなわれないとするか—これは不可能です—、それとも、これ以上たしかなことはありませんが、すべて滅びゆくものは善を奪われてゆくのであるとしなければなりません。しかしすべての善を奪われた場合には、全く存在しなくなるでしょう。というのは、まだ存在していながらももはや滅びることができなくなつたとすれば、そのものは不滅にとどまるわけですから、前よりも善いものになるはずです。けれどもすべての善を失ったあげくのはてに、前より善いものになるなどというほど奇妙なことはありません。ですからすべての善を奪われたならば、全くの無になるはずです。従つて存在するかぎりは善いものなのです」。

在らしめられて在る被造物は、在りて在るものから一切の存在を受けて存在する。従つて、本性がこのように神に負う存在が善であるのは当然なのである⁽⁶²⁾。逆に言えば、在らしめられて在るもののがめは、自らの存在が本来、善であることを知り、その本性が欲求し、希求すべき完成へと向かうことでなければならない。

トマス・アクィナスは、善⁽⁶³⁾とは、およそ望ましきもの、希求さるべきものに他ならないと述べている⁽⁶⁴⁾。全ての本性は自らの存在と完成を希求するものである以上、それぞれの存在と完成がそもそも善という性格を有しているのだと言う。従つて悪は、或る存在とか或る形相ないし本性を

表示するものではなく、善の不在⁽⁶⁵⁾であると言うしかない。したがって悪は存在者でもないし善でもない⁽⁶⁶⁾。

とすれば、なぜ被造物は壊敗し、墜落するのか。それは、被造物が可変的だからである。なぜ可変的であるのか。最高度に存在するものではないからである。なぜ最高度に存在していないのか。それは被造物を創造したかたより劣っているからである。誰が被造物を創造したのか。最高度に存在するかたである。それは不变な神である。なぜなら、神は最高の知恵によって被造物を創造し、最高の慈愛を持って被造物を維持したもうからである。彼はなぜそのような被造物を創造したのか。それらを存在せしめるためである。被造物自体は、それがどの程度であっても、存在する限り善である。なぜなら、最高善の最高の存在であるからである。では神はその被造物を何から創造したのか。無からである⁽⁶⁷⁾。これが可変性に伴う形面上学的悪のアウグスティヌス的解釈である。

アウグスティヌスは『善の本性』第1章の冒頭に次のように述べている。

「最高善—それ以上のものは何も存在しない—とは、神である。それゆえ、それは不变的な善であり、従って、真に永遠、また真に不滅である。他のすべての善は、神による⁽⁶⁸⁾のでなければ存在しないが、神から存在するのではない。なぜなら、神から存在するものは、神だからである。しかるに神によって造られたものは神ではない。それゆえ、もし神のみが不变であるならば、神が造ったすべてのものは、神が無から造ったので、可変的である。神は全能であるから、無からでも、すなわち全くの非存在からでも、諸々の善を、大きなものも小さなものも、また天上的なものも地上的なものも、また靈的なものも物体的なものも、造ることができる。しかし神は正しいかたでもあるので、無から造ったものを、自身から生んだものに等しくすることはしなかった。それゆえ、全ての善は、事物のあらゆる段階を通じて、大きなものであれ、小さなものであれ、神によるのでなければ存在しえず、全ての本性は、それが本性である限りにおいて善であるから、全ての本性は、至高にして真なる神によるのでなければ、存在しえないことになる。なぜなら、全ての善は、最高善ではないが最高善に近い善も、さらに、最高善から遠く隔たっている最低の善も、最高善によらなければ存在しえないからである。それゆえ、全ての可変的な靈も、全ての物体も、神によるのであり、これらは全て造られた本性である」。

神はすべての被造物を自身より劣るものとして創造した。生み出すものは、生み出されるものより優れているというのが、新プラトン派の伝統であり⁽⁶⁹⁾、アウグスティヌスがこの種の考え方へ影響を受けているのは明らかである。しかし被造物は神に劣るとは言え、神によって創造されたものである以上、善であることに変わりはない。自然の事物は確かに壊敗するが、それは可変性の故であって、最高度に存在しないものには可変性が免れないからである。自然界の悪はすべて、その本性が可変的であることから生じる。しかし自然の事物自体は、神によって創造されたものである以上、これもその存在自体が悪であることはありえない。自然の事物の場合、その形態の美が壊敗されることが悪なのである。なぜなら被造物は最も高く善でもなければ、互いに等しく善でもなく、また変わることなく善でもないが、それにも関わらず、一つ一つが善である。しかも同時に全体としてもはなはだ善⁽¹⁾だからである。全体の驚嘆すべき美は、この万物から成り立っている⁽⁷⁰⁾。

しかしあよそ存在すると言われるものには、物質のように単に存在するものと、生きているという状態で存在するものと、知解するという能力を持って存在するものとがある。存在、生命、知解の三段階である。それぞれの被造物はそれぞれの本性の段階に応じて、それぞれが持つべき本性を

授けられて創造される。従ってそれらの本性には優劣の差が生じる。例えば、石は存在すると言えるし、動物も生きていると言えるが、石が生きているとは言えないし、動物が知解するとは思えない。生きているものは必ず存在するが、存在するものが必ず生きているとは言えない。まして知解するものではありえない。とすれば、知解できるものが、被造物の中で最大に最高善に近い存在だと言うことになる⁽⁷¹⁾。

知解能力を授けられた人間の場合にも、病気、不具、奇形に象徴される壞敗は悪だと言って差し支えないが、自由に決定する意志を授けられた人間に限れば、悪とは、授けられた善の悪用であって、それは、神の命令に対する違反、つまり神の意志に反する人間の意志の転倒⁽⁷²⁾に他ならない。それが罪と言われるものである。更にこれが原罪と結びつけば、こうして人間は、楽園からこの現実の世界に放逐されたのだと言われる⁽⁷³⁾。

アウグスティヌスの悪は、もっぱら可変性としての形面上学的悪と罪としての道徳的悪に極端に切り詰められている。そして最後には人間の自由意志から本来の意味での自由も奪われる。神の恩寵がなければいかなる知恵も、自由も、被造物の存在も、原罪からの解放もいっさい持つことはできない。

人間にとって、悪の認識は善の認識なしにありえない。我々がいつも闇の中にいるとしたら、闇を知ることはないが、光についての知識には必ず対立する闇の認識が伴うと言う⁽⁷⁴⁾。悪は、それと結びついた善の力によることがなければ、働くことも欲求されることもない存在だからである。「明と暗はいわば二つの対立物のように言われているが、暗も何がしかの光をもっているのであり、もし光が全く欠けてしまったら、沈黙が音声の不在であるように、光の不在としての闇があるのみである」⁽⁷⁵⁾。

善が存在しなければ、悪は存在しない。もし全く悪のない善があるなら、それは完璧な善である。しかしそこに悪が内圧し、傷と欠陥を与えて、それは悪と善が実体として共存⁽⁷⁶⁾することを意味せず、傷と欠陥を有する善と見られる⁽⁷⁷⁾。大きな善は消滅することはないが、小さな善は消滅しうる⁽⁷⁸⁾。例えば死について言えば、以下のように言われる。

「死もまた神から由来するものではない。神は死を造りたまわらず、生けるものが滅びることを喜びたまわない⁽¹⁾からである。最高の本質は存在するすべてのものを存在たらしめており、それゆえに本質と呼ばれるのである。しかし死は死ぬところのものを、それが死ぬ限りにおいて、非存在へと強いるのである。そこでもし死ぬところのものたちが完全に死滅するとすれば、それらは疑いもなく無に帰するであろう。しかし死ぬところのものは、それが本質にあずかることが少ないとおいて、死ぬのである。つまりそれらは存在することが少なければ、それだけ大いに死んでいるのである。肉体はどんな生命より少なく存在している。なぜなら、肉体はいかに小さな形をとっているとしても、生命によって存在しているからである」⁽⁷⁹⁾。

それに依存して存在するものは、当の存在より価値において低く、かつそれだけ善が少ない。善の位階は神と無の間に種々な位相で存在している。より神に近いものを大きな善、より無に近いものを小さな善と言う。たとえ小さな善がこのように消滅しうるにしても、消滅そのものが成立するには存在するものがなければならない。この場合、それは生命である。この生命もやはり、自分より劣る肉体を享受することを喜び、神をないがしろにすれば、無へと落ちて行く。これは、可変的な被造物の宿命である。しかし魂の生命の生命⁽⁸⁰⁾、つまり魂に生命を与える神は不滅である。そし

てそのかたが被造物を創造したのである。論議はここに至って循環する。なぜなら、最高善である神が創造した被造物は、その限りにおいて善と言えるからである。神は、悪からでも善をつくりだすほど善であり、かつ全能でなければ、自分の作品の中に何らかの悪を許すことはない。

「どのような悪事であれ、それが起こることを許すことによってさえ、神が善をなしたもうことを疑うべきではない。というのは、神が正しい審判によって許したものでなければ、そのことは起こらないからであり、また正しいことはすべて確実に善であるからである。従って、惡であるものは、それらが惡である限りにおいては、善ではないが、神が善いものだけでなく、悪いものにも存在を許したものと善である」⁽⁸¹⁾。

悪いものにも存在を許したというのは、「人間が自らの意志の不正によってこれらの善を悪用しても、神は、その権能と正義によって、罪のうちに自らをよこしまに秩序づけた者たちの惡を善用し、彼らの罰のうちに正しく秩序づけることを意味する」⁽⁸²⁾。悪いものにも存在を許しておきながら、彼らに正しく罰を与えられる神なのである。これが惡をも善用するとされる神の姿である。

アウグスティヌスは言う。「私は善を造ろう、惡を創造しよう」⁽⁸³⁾。神によって創造された被造物がすべて善であることがわかったなら、神に感謝しなさい。もし分からなければ、静かにしてまだ分からぬことを軽率に非難してはならない。そして理解できるように精神の光であるかたに祈りを傾注しなさい」⁽⁸⁴⁾と。

VII 悪と秩序と神

悪と秩序の問題とは、悪と神の摂理との問題である。この世に悪が氾濫している事実と神の摂理とをどのように調和させればよいのか。悪をどのような位置に据えれば、秩序と両立させられるのか。これは、秩序の中での悪の位置付けを改めて問い合わせることもある。

人間の視野は限られている。タイルの一つを見て、世界全体の秩序を云々するほど狭隘なものである。にもかかわらず軽率にも、世界には秩序など存在しないと言い切る。しかしそのタイルの一つを全体の構図と秩序の中に位置づけて見ることができるなら、それは素晴らしい秩序のうちに存在することができる。我々の精神が虚弱なために、我々には万物の全体的な相互的適合と協和とを把握することができないのである。この誤謬の最大の原因是、人間が自分自身を知らないことによる。自分自身を知るために、感覚から身を引き離し、心それ自体に集中し、自分自身にたちもどる必要がある。自分自身に立ち返った魂だけが宇宙の美の正体を理解できる。なぜなら宇宙＜universitas＞とはもともと一なるもの＜unum, uni＞を象徴する言葉だからである。それは円における中心がそうであるように、自己以外の一切を同等に計測し、すべての部分を一種の平等の法によって支配するものである。魂も、自己自身の内部の中心点に一切の関心を集中する必要がある⁽⁸⁵⁾。そうすれば、宇宙の秩序の真の意味が見えてくる。それによって何が見えたのだろうか。

アウグスティヌスは言う。

「この全体の中においては、悪といわれているものも、よく秩序づけられてその場所に置かれると、善いものをよりいっそう引き立たせることになる。というのは、善いものは悪いものと比べられることによって、よりいっそう人の心を喜ばせ、またよりいっそう賞賛すべきものとなるからである」⁽⁸⁶⁾。

これが、全体と部分、完全性と不完全性との対比において見られると、

「すべてのものは、それぞれの役割と目的に従って、宇宙の美を形成するように秩序づけられており、部分的に見ると恐れおののくようなものも、もし我々が宇宙全体として熟慮する時には、大いに喜ばしいものなのである。なぜなら、建築について判断する場合でも、ただ一つの角度から考えるべきではなく、美人を判断する場合も、ただ頭髪だけを見て判断すべきではなく、巧みな演説について判断する場合でも、ただ指の動きだけを見て判断すべきではなく、また月の運行について判断する場合でも、ただ三日間の形だけを考慮に入れるべきではないからである。<中略>。絵の中の黒い色も全体と共に見るならば美しいように、不变の神の摂理は、あるものを敗者に、あるものを決然と戦う者に、あるものを勝利者に、あるものを観客に、あるものをただ神を静かに瞑想する者にしながら、この人生全体の競技を優美に完成するのである」⁽⁸⁷⁾。

このアウグスティヌスの主張は、悪を善の飾り物にする主張である。この思想の背後には、異端や悪に対する極端に良識を欠いた偏見がある。自分たちの教理に反するものは、自分たちの真理をより強く意識させるのに有用であるとする論理が、悪にも適用される。これは、キリストがさらしものになったように、単に異端者だけでなく悪人をもさらしものにする思想である。

「けれども異端は、教会の外部にいる時には、大いに役立つのである。もちろん彼らは真理を知っていないのであるから、真理を教えるということによってではないが、肉的なカトリック教徒たちをして真理を求めさせるように覚醒させ、靈的なカトリック教徒たちが真理を明らかにするように駆り立てるという点で、大いに役立つのである」⁽⁸⁸⁾と。

更に、

「思うに死刑執行人よりももっと嫌らしいものがあるだろうか、彼の心よりももっと陰険で冷酷な物があろうか。ところが実際は、彼は法自身の間にあって必然的な場所を占め、治安の善い国家の秩序の中にも自己の場を与えられている。また彼は、自分自身の心において咎ありとされるが、他の秩序においては、咎ある人々に対する刑罰となっている。娼婦、売春斡旋人またはその他のこの種の有害な人々ほど汚れた品の欠けた、醜に満ちたものが何かあるだろうか。だが、娼婦を人の世からなくせば、君はすべてを情欲によって混乱させられることになるだろう。<中略>。それゆえこの種の人間は、生活の上では、その道徳的行為のゆえに、この上なく不純ではあるが、社会の必要な条件の上では、秩序の法則ゆえに、極めてわずかではあるが価値をもつのである。<中略>。しかしながら自然の秩序は、それらが必要であるがゆえに、それらが欠けることを欲しないし、それらが醜いがゆえに、それらがあらわになることを許さないのである。だが、これらの醜いものは自分自身の場所をもつことによって、よりよきものに優れた場所を譲っているのである」⁽⁸⁹⁾。

秩序を全体として捉えることには異存はない。しかしそれが結果として、悪を善の飾り物にしてしまうのはどうだろうか。まして娼婦や死刑執行人を例に引く不見識は、現代人の誰をも納得させられるものではない。『再考録』を見ても、この点については何ら修正を加えているようには思えない。

存在するものは存在する限り善であるということの意味が、悪をこのような位置に据えることであるとするならば、いま一度その理屈を考え直す必要がある。神は悪をも創造された。問題はその

一点に絞られる。これによって彼はマニ教的二元論から墮したと信じた。しかし逆にそれは極めて奇妙な論理を生むに至った。悪を善の飾り物にする思想は、神の正義という名目で、不信者や悪人その他の罪人を容赦なく罰する懲罰思想を明確に生み出すことになる。敵は許しても、罪人は許されない。それが、神の正義なのである。

神は、『出エジプト記』3・14に語られているように、「私はある、私はあるというものく在りて在るものゝ」である。神は存在そのものであり、最高の本質であり、万物の原理、源泉であり、一切の被造物は、その神によって存在させられている。つまりそういう意味で、被造物は在らしめられて在るものである。従って被造物は、そのすべてを神に負っている。そのような被造物に果たして神の真の姿が捉えられるのだろうか。アウグスティヌスは、『三位一体』第7巻第4章7において「神は言葉で述べられるよりも、もっと真実な姿で心に描かれるし、心に描かれるよりも更に真実な姿で存在している」と述べている。被造物の愚かな言葉や思惟を超えて、あくまでも超越的に存在するものとされる。

「神は、性質のない善、量のない偉大さ、欠くところなき創造者、位置なくして統治するもの、外的な状態なくして万物を包括するもの、場所的な規定なくして偏在するもの、時間なくして常住するもの、自らは変化することなく、可変的なものを創造するもの、情念のないものとして知解するものと言われる⁽⁹⁰⁾」。

このような神だからこそ、彼は「あなたこそ私の主。なぜなら私の善を必要となさらないのですから」⁽⁹¹⁾と言えたのである。

唯一の永遠にして真なる実体。いかなる不調和も、いかなる混乱も、いかなる変異も、いかなる欠乏も、いかなる死もないもの。そして最高の融和、最高の明晰、最高の恒久、最高の充実、最高の生命であり、何ものも欠けることなく、何ものも過ぎ去ることはない⁽⁹²⁾ものもある。

このような神に彼は、全身全霊を込めて祈りを捧げる。

「神よ、万有は自分自身では存在しえず、神によって存在へと至る。

神よ、あなたは万人の眼に限りなく美しく映ずるこの世界を無から創造したもうた。

神よ、あなたはこの世界の最末端のものに至るまで不協和を造りたまわない。

神よ、万有はあなたのうちにあるが、全被造物の醜悪さもあなたを汚さず、また惡意もあなたを害せず、誤謬もあなたを誤らせない。

神よ、あなたを見捨てることは、すなわち滅びること、あなたに心を向けることは、すなわち愛すること、あなたを見るることは、すなわちあなたを所有すること。

神よ、あなたは感覚の知られざる世界の全域を統べたもう⁽⁹³⁾」。

VII 結論：課題と展望

アウグスティヌスは確かに偉大な教父であり、哲学者であり、その影響力は、単にキリスト教神学に留まらず、哲学者たちにも及んでいる。しかしたとえどれほど偉大な思想家と言えども、その考え方には欠点のない思想家はない。哲学や神学の歴史は、科学とは異なり、古代より何ら進歩することなく永遠に同じような主張や反論が繰り返されているように見える。確かにホワイトヘッドが述べたように、西洋思想はプラトンの注釈⁽⁹⁴⁾であるとも考えられる。とりわけアウグスティヌス

スの思想には、プラトン的、プロティヌス的思想が顕著である。しかしこれはプラトンとアウグスティヌスが全く同じ思想を述べたという意味ではない。同じことと、同じように見えることとは自ら異なる。

哲学史も科学と同様に、思想が蓄積されて進み、その上に後の思想が積み重ねうるものだとすれば、現代の我々にも何ほどかの積み重ねが可能であるはずである。思想史がそういう意味で、それぞれの思想家がその見解を披瀝する舞台であるとするなら、我々もその真理を検証するために、それらの思想家を吟味に掛ける必要がある。思想史そのものが真理検証の実験室に他ならないからである⁽⁹⁵⁾。偉大な思想家にも、自らの理論の完全性に固執する余り、単純化されすぎた考え方が認められる。アウグスティヌスは、マニ教的二元論を極端に意識しちぎたために、悪を善の欠如とみなすような不自然な思想にとりつかれてしまった。彼は、悪を無と見なしたにも関わらず、その無に脅え、その無の前に空虚とも思える理論を築いた。

またアウグスティヌスは、悪を善に限定しすぎたために、人間の意志に関わらない物理的悪に対する配慮を欠いた。形而上学的悪は、被造物の可変性、不完全性によって説明できるにせよ、自然的悪は、単に壊敗や変化だけでは説明し切れない。病気は健康という善の壊敗であるとするだけで、果たして病人は救われるだろうか。ヨブの苦しみは、全能なる神の前にひれ伏せる人間には救いになつたかもしれない。しかし我々には到底真似のできないことである。「なぜ私が癌にならねばならないの」。「なぜ愛する我が子が死ぬ必要があるのか」。「なぜこれほどひどい災害に見舞われねばならないのか」。「どうして世界には眼に余るほどの惨事が起きるのか」。

このような問いに、アウグスティヌスは一体どのように返答するだろうか。悪は善の欠如であり、実体ではない。悪人は悪い善人である。全てのものは存在する限り善なのだ。しかし娼婦は凡人の肉欲を満たすために必要だし、悪は善の彩りに神が創造した一種の善なのだ。悪を犯したものは神の正しい罰を受ける。神から授けられた自由意志を悪用するからである。更には人間は生まれ落ちた時から原罪を背負っているとまで主張される。そしてその罪は幼児にさえ適用された。一切の被造物にその罪を拭う力はない。

だから身を清くたもち、神に祈りを獻げよ。そしてどのような時にも、信仰を失わず、希望と愛を信じよ。神の国は近い。そして1500年余が経過した。無神論者は言う。神は完全なる実在である。完全なる実在は全能なる実在である。全能なる存在はただ一人の力で実際に悪のない世界を生み出すことができる。道徳的に完全な存在は実際に全く悪のない世界を生み出すことを望むだろう。世界に紛れもなく悪が存在するとすれば、神は存在しない。にもかかわらず、世界には紛れもなく悪が存在する。とすれば、神は存在しないという結論になる⁽⁹⁶⁾。

悪が現存することから、ただちにこのような結論に至ってよいのだろうか。悪の存在を認めるることと神の全能とは果たして両立しないのだろうか。人間には眞の自由は与えられていないのだろうか。あるいは自由を得るために神を否定しなければならないのだろうか。また変化は全て悪だと断定する主張は、形而上学的偏見ではないのだろうか。全知全能の神は被造物の善を何ら必要としないのだろうか。われわれ被造物には神に与えられうるものは何もないのだろうか。マニ教的二元論にも脱せず、無神論にも終わらず、古典的有神論とも異なるような神学は存在しないのだろうか。

現代の神学者たちや哲学者たちは、このような問題意識をもって古典的有神論に代わる新たな理

論を築きつつある。なかでもプロセス神学は、悪の問題に独自の解決をもたらしたものとして注目されてきた。ジョン・ヒックの『宗教哲学』第4版には、新たにプロセス神学の弁神論が「悪の問題」の章に付け加えられている。またプロセス神学の生みの親の一人であるチャールズ・ハーツホーンは、現在百一歳でなお現役で活躍されている。

注

- (1) 『告白』世界の名著山田晶訳、解説「教父アウグスティヌスと告白」26頁。
- (2) 『アウグスティヌスの根本問題』239-240頁。
- (3) もっともこの主張は、基本的にはコプルストンなども採っている解釈である。『中世哲学史』第3章2「要するにアウグスティヌスは神学者と、自然的人間を考察する学者という二つの役を演じたのではない。むしろ彼は、具体的な人間、堕落し救済される人類としての人間、真理を獲得しうるが、しかしつねに神の恩寵に導かれ救済の真理を自己のものとするために恩寵を求めている人間を考察したのである。<中略>。神は存在すると人に納得させることが問題になる場合でも、アウグスティヌスは証明を人間の回心と救済の全過程の一段階ないし一つの道具と見なしたであろう。<中略>。理性の果たすべき役割は、人を信仰へともたらすことであるが、人がひとたび信仰を得たならば、理性の役割は信仰が与えるものを洞察することである。」。第3章2を参照。
- (4) 『アウグスティヌスの根本問題』9「悪の存在」260頁。
- (5) 『自由意志』第1巻第2章、23頁。
- (6) 『告白』第1巻第1章、訳書60頁には、この並行関係が次のように記されている。「主よ、私はあなたを呼びもとめながらたずね、信じながら呼びもとめたい」。
- (7) 意志とは、何ものにも強制されず、何かを失うまいとする、あるいは獲得しようとする魂の運動である。<『二つの魂』第10章・14>
- (8) 『二つの魂』第11章・15。
- (9) 『信の効用』序文16頁。
- (10) これはアリストテレスの『プロトレプティコス』の翻案だと言われる。<『世界の名著アウグスティヌス』山田晶訳111頁解説(8)>
- (11) 『至福の生』第14章4を参照。
- (12) (4) の註を参照。
- (13) 『世界の名著』アウグスティヌス『告白録』第3巻第4章。
- (14) 『告白』第8巻第12章。
- (15) 「宴会と泥酔、好色と淫乱、争いと嫉みとをすてよ。主イエス・キリストを着よ。肉欲を満たすことに心を向けるな」<ローマの信徒への手紙、13・13-14>『告白録』286頁。
- (16) 例えは彼は、『ソリロキア』<アウグスティヌス著作集第1巻、訳書451頁>では、次のようなことを述べている。「わたしはくこの世の生にあっても、魂は神を理解することによって、確かに至福となる」と言った。だがおそらく希望がなければ至福ではないだろう。同様に、私

はく知恵との結合に至る道は一つしかないわけでもない>と言ったが、これもあまりよい響きをもっていない。と言うのは、「私は道である」と言いたもうたキリスト以外にも別の道があるかのように思われるからである」。

あるいはまた、上掲書、同再考録第1巻第4章には、「同書第2巻では魂の不死性について長く論じられているが、解決にもたらされてはいない」という自己批判の言葉が見られる。

- (17) 知性の確固たる理拠によって把握することのみを「知る」と言っている。しかしこれは身体の感覚で感じたり、また信じるにたる証人によって信じることを、何の躊躇もなく「知る」と言っている。『信の効用』再考録第1巻第14章、著作集4、81頁。
- (18) 『信の効用』第2章(11・25) 著作集4、58頁。
- (19) パスカルの『パンセ』257 「三種類の人だけがある。その一つは、既に神を見出して、神に仕えている人々、次にはまだ神を見出していないので、努力して神を求めている人々。第三は、神を求めようともせず、見出したわけでもなく生きている人々。第一の人々は、道理にもかない、幸福である。最後の人々は、愚かであり、不幸である。真ん中の人々は、不幸ではあるが、道理には適っている。
- (20) 同書(11・25)、訳書54頁。
- (21) 『アカデミア派駁論』第3巻20章、訳書152頁。
- (22) 『ソリロキア』第2章、訳書339頁。
- (23) アウグスティヌスは、終生悪の問題に悩まされ続けたとする解釈もある。山田晶『アウグスティヌスの根本問題』260頁「悪の問題」冒頭にはこのように記されている。「まことに悪の問題は、青年時代の彼を苦しめた。しかしただ青年時代だけではない。全生涯にわたって苦しめた。彼の一生は悪の問題との悪戦苦闘のうちについやされた。そのたたかいを通して彼の思想は深められ発展していった。しかし悪の問題が彼を苦しめたということは、数学の難問が数学者を苦しめたというのと同じではない。アウグスティヌスを苦しめたのは<悪の問題>ではなく、じつは<悪>そのものであった。彼の自己の内と外とに様々な形態の悪が充満しているのを認めた。悪がアウグスティヌスを苦しめたというのは、重い病を身に負うた人間がその病に苦しめられたというのに似ている。しかし病人はただ病苦のもとに呻いているだけではない。かならず病から解放を求めるであろう。アウグスティヌスも身に負うた悪のもとにただ苦しんでいるだけではない。悪からの解放を求めた。ここにおいて彼を苦しめた悪は、彼自身にとって一つの問題として意識されてくる。それは、<いかにして悪から解放されるべきか>という救済の問題である。しかし悪から救済されるためには、悪の実体が見きわめられなければならない。ここにおいて悪は第二の問題を生ずる。それは<悪とは何か>という本質の問題である。この二つの問題は問題としては区別される。しかしウラグスティヌスにおいては密接に関連しており、一方を離れてた方は存立しえない。そしてこの二つの問題は、アウグスティヌスを彼自身の深い内部から苦しめていた根源的な悪そのものに根差している。アウグスティヌスにおける悪の思想の発展とは、悪の問題との悪戦苦闘を通して彼がこの根源的な悪をより根源的に自覚してゆく過程に他ならない。この論文は次のような文面で終えられている。「では回心によって悪の問題は解消したであろうか。否である。回心は彼の魂を恩恵の光の内に引き入れた。彼の心は以前のような不安の内に動搖することはなくなつた。しかし恩恵の光は、魂のうちに

ひそむ意志の邪曲の根深さより一層深く彼の前にあらわにしてゆく。その悪の根源はアウグスティヌス個人の意志をこえて全人類の意志にかかわり全人類の意志を侵害している。アウグスティヌスは恩恵の光のもとにそのことを深く認識してゆく。そして以前とは別の意味において、悪は彼の内のみならず、彼を含めた世界の中に浸透していることを知ってゆく。そして悪から人間を救う力は絶対に人間ではなく、人間以外のいかなる被造物にもなく、ただ神の子となりたもうたキリストの贖いのみがこの悪から人間を救うものであることを、年毎に深く認識してゆくのである。悪の問題はアウグスティヌスをその生涯にわたって不思議な仕方で苦しめた。まことに悪はアウグスティヌスに、その生涯、からみついて離れなかった不思議なるもの、ミステリウムであった。このミステリウムにキリストのミステリウムが対応した。悪のミステリウムのうちに深まれば深まるほど、アウグスティヌスはキリストのミステリウムのうちに深く身を没していったのである」。

- (24) プロティノスの善や悪の定義等については、アウグスティヌスを理解する上に必要不可欠なものだか、本論では触れない。ただ本論に参考になるような定義だけをここに一括して挙げておく。

例えば善については、「善とは、次のようなものである。すなわち、<万物がそれに依存するもの>、<全存在がそれを始原としてもち、それを必要としているので、欲し求めるもの>であるが、それ自体は<何も欠けたところがないもの>、<それ自体で十分なもの>、<何も必要としないもの>、<万物に適度さと限度を与えるもの>、<知性、実在、魂、生命、知性活動の源となっているもの>である」。『エンネアデス』第一論集、第八論集「悪とは何か、そしてどこから生ずるのか」2、198頁<世界の名著『プロティノス、ポルピュリオス、プロクロス』>。

また悪については、「悪は、例えば<尺度>という点から見ると、<適度さを持たないもの>であり、<限度>という点から見ると<限度を持たないもの>、<形を与えるもの>という点から見ると<形を持たないもの>、<自足的なもの>という点から見ると<いつも不足を感じているもの>であって、<永久に規定できないもの>、<決して静止しないもの>、<完全に受動的なもの>、<満足することのないもの>、<全ての面で貧しさにつきているもの>である」『エンネアデス』第一論集、第八論集「悪とは何か、そしてどこから生ずるのか」3、200頁<世界の名著『プロティノス、ポルピュリオス、プロクロス』>。また「悪は、(これがないとかあれがないというように)<任意のあるものに欠けていること>の中にあるのではなく、<どんなものにも全く欠けていること>の中にあるのである。とにかくほんの少しだけ善に欠けているものは、悪ではなくて、そのものだけが持つ自然的傾向から見れば、完全でもありうるからである」<『エンネアデス』第一論集、第八論集「悪とは何か、そしてどこから生ずるのか」5、203頁<世界の名著『プロティノス、ポルピュリオス、プロクロス』>。「全くの欠如は<悪>を意味する」<『エンネアデス』第一論集、第八論集「悪とは何か、そしてどこから生ずるのか」5、203頁<世界の名著『プロティノス、ポルピュリオス、プロクロス』>。

- (25) 光の国を支配するのは、「光の父」あるいは「父なる神」であるが、この神と光の国とが全く同じであるかどうかは、はっきり語られていない。しかし、父なる神からでたものは神と本質を同じくし、従って、すべて光の国に属するものは、いわば神の部分ということになる。闇

の種族は、闇、水、風、火、煙の五つに分かれている。対立する二つの本性の、それぞれの内部における区分や関係は不明瞭であるが、いずれにせよ、それぞれの本性において同一の本質を持ったものであり、二元論の枠内での一種の汎神論と考えることができよう。

この二つの対立する本性ないし原理が分かれたままではなく、両者が戦い、混合することによって、この世界はできた。戦いは、闇の側から攻撃を仕掛けることで始められ、父なる神は、「原人」<アダムではない>を使わして対抗させ、原人は、エーテル、風、光、水、火の五つの元素を率いて戦ったが、敗北し、捕らえられてしまった。こうして光と闇は混合するようになった。<中略>やがて、「生ける靈」によって原人は救い出されたが、五つの元素は取り残されてしまった。こうして、世界は、善と悪が対立しつつも混合している状態にあるが、世界のうちにある光の要素を救い出すこと、すなわち悪からの解放がマニ教の中心になっている。

- (26)『善の本性』第36章、訳書207頁。
- (27)『フォルトゥナトウス駁論』15。
- (28) 1オモテ 6・10。
- (29)『自由意志』第3卷17章48。
- (30)コリント2, 4・16。
- (31)『真の宗教』308頁。
- (32)『基本書と呼ばれるマニの書簡への駁論』第35章。
- (33)『自由意志』訳注574頁(23)。
- (34)『善の本性』訳注293頁(4)。
- (35)『善の本性』第18章、訳書190頁。
- (36)『音楽論』<アウグスティヌス著作集第3巻>訳注589頁(5)を参照。
- (37)『自由意志』訳注574頁(23)。
- (38)『善の本性』第14章、訳書187頁。
- (39)『善の本性』第23章、訳書195頁。
- (40)欠損運動とは、物体の一般的な運動である場所の移動ではなく、生成や消滅、合成や減少を指している。なおプラトンは、『法律』893C-895Bにおいて、十種類の運動について触れている。

①回転運動、②場所の移動、③分解、④合成、⑤増大、⑥減少、⑦消滅、⑧生成、⑨他のものを動かすことはできるが、自分自身も他のものによって動かされる動。⑩自分自身を動かすことができると共に、また他のものをも合成や分解、増大やその反対の減少、生成や消滅という仕方で動かすことができる動。

なお訳文の文脈からは、もう一つ⑨に関して、「他のものを動かすことはできるが、自分自身は動くことのできない動」もあるように読める。いずれにせよ最高の運動は、自分で自分を動かすことのできる動であることに変わりはない。自分で自分で動かすことのできるこの動こそが、運動の始原である。魂は、この自分で自分で動かすことのできる動に他ならない。

- (41)『自由意志』第2巻54、訳書136-137頁。
- (42)『基本書と呼ばれるマニの書簡への駁論』第36章41、アウグスティヌス著作集7, 164頁。
- (43)『善の本性』第6章<アウグスティヌス著作集第7巻>。

- (44) 『自由意志』著作集第3巻, 訳書137頁。
- (45) 『自由意志』第2巻54, 訳書137頁。
- (46) 『告白』第7巻第5章<訳書227頁>には、「死の恐怖から生ずるひどい心配におしつぶされ
て、真理を発見できませんでした」とある。
- (47) 「しかし盜みが無であるとすれば、私はますますあわれな者だったわけです」<『告白録』
第2巻第8章, 130頁>。この場合無は、実体の欠如ではなく、nequitia<無価値的なもの>
を意味している。
- (48) 『基本書とよばれるマニの書簡への駁論』38章, 訳書168頁。
- (49) 『告白』第6巻6章, 198頁。
- (50) 『告白』第12巻第39章, 479頁。
- (51) 『善の本性』第19章, 訳書191頁。
- (52) 『パイドン』79Aには、存在には二種類あるとした上で、以下のように述べている。「見えざ
るものの方<魂>は、常に同一性においてあり、他方、見えるもの<身体>の方は、決して同
一性を保つことはない」。

『国家』Ⅱ379B-Cには、

「善いものであれば、そのどれひとつとして、有害なものではないはずだ」。「そう思
います」。「では一体、有害でないようなものが、害を与えることがあるだろうか」。「いい
え決して」。「害を与えないとすれば、それが何か悪いことをするだろうか」。「そういう
ことはありません」。「しかるに、何も悪いことをしないとすれば、そういうものが、何
らかの悪の原因であるということもないだろうね」。「ええむろんです」。<中略>。「す
ると、善いものは決してあらゆるもの的原因ではなく、善い状態にあるものの原因では
あるけれども、しかし諸々の悪いものについて責任がない（原因でない）ことになる」。
「全くその通りです」。

『国家』608E<訳書341-342頁>には、

「滅ぼしたり損ったりするものは全て悪いものであり、保全し益するものは善いものだ
ということだ」。「確かに」と彼。「ではどうだろう、それぞれの藻のには、それぞれの
固有の悪いものと善いものとがあることを認めるかね。例えば、目にとつては眼炎、身
体全体にとっては病気、食物にとっては黴、木材にとっては腐朽、銅や鉄にとっては錆
びがそうであり、かくて僕の言うように、ほとんど全てのものには、それぞれと密接に
結びついた固有の害悪によってこそ滅ぼされるのであり、あるいはもしそれによって滅
ぼされないとすれば、もはやほかには、その当のものを滅ぼすものはありえないこと
になるわけだ。なぜなら善いものは何ものをも滅ぼすころはないだろうし、さらには善く
も悪くもないようなものも、同様だから」。

同書380D<訳書上164頁>には、神の不变性に因んで以下のように述べられている。

「神とは魔法つかいの様なものであって、ある時には色々と多くの形へと実際に変身し
て自分自身の姿を変え、またある時には我々を欺いて、自分についてただそのように見
せかけることにより、その時その時で、故意に様々な違った姿で現れることができるも
のだと思うかね。それとも、神は単一な性格のものであって、自分自身の姿から抜け出

すというようなことは、到底あるえないと思うかね」「ちょっとすぐには答えられません」。「ではこの点はどうかね。もし何かが自分自身の姿から抜け出すとすれば、自分が自分で変わるか他のものによって変えられるか、このどちらかでなければならないのではないか」。「そうでなければなりません」。「そこでます、他のものによって動かされて変様させられるということの方だが、これは最も優れた状態にあるものには最も起こり得ないことではないかね。例えば、身体は、食物や飲み物や労苦に影響され、また全ての植物は、太陽の熱や風やそれに類するものの影響を蒙るけれども、その場合、最も健康で最も強いものほど、変様を受ける度合いが最も少ないのでないかね」。「確かにその通りです」。「また魂は、最も勇氣があり、最も思慮のある魂ほど、外部からの影響によって変様を受けたりすることが最も少ないのでないかね」「ええ」「またおそらく、全て組み立てられてできる道具やたけものや衣服にしても、同じ道理で、よく作られてよい状態にあるものが、時間その他の影響によって変様を受けることが、最も少ないので」。「そのとおりです」。「こうして生まれつきにせよ、技術によるものにせよ、或いはその両方によるものにせよ、全て優れた状態にあるものは、他のものにより変化を受け付けることが最も少ないのでない、ということになる」。「そのようです」。「しかるに神および神に属するものは、あらゆる点で最も優れた状態にあるはずだ」。「もちろんです」。「こうして、この観点から考える限り、神が色々と多くの姿をとるということは、最もあり得ないことになるだろう」。「確かに最もあり得ないことです」。

- (53) 『パイドン』 65, 世界の名著503頁。
- (54) 『二つの魂』 第2章, 訳書14-15頁。
- (55) 『二つの魂』 第5章, 訳書19頁。
- (56) 『ソリロキア』 第1巻14章24<著作集1 訳書372-373頁>。

『ソリロキア』のこの文章は、十四年後に書かれた『告白録』第7巻17章に至って、次のような瞬間として回顧されている。「このようにして私は段階的に、諸々の物体から身体を通して感覚する魂に、それから、身体の感覚を通して外部の情報を受ける魂の内なる能力に—ここまででは動物にもできます—、更にそれをこえて、身体の感覚からえられるものを判断する推理能力へと上昇してゆきました。しかしそれも自分の内の可変的なものに属すると悟り、知性的自己認識にまで自分を高め、思考を習慣から引き離して、反対する様々な幻想の群れから身を遠ざけ、ある光をそがれたことを悟り、<不变のものは可変のものにまさる>と何の疑いもなくさけんだ時、その光によって<不变なもの>自体を知ったのです—じっさい、何らかの仕方でそれを知らなかつたならば、それが可変的なものにまさると確信をもって言うことは絶対できなかつたでしょう—そしてついに、おののくまなざしで<存在するもの>を一瞥するに至りました」。

- (57) 『ソリロキア』 第1巻23, 訳書370-371頁。
- (58) 『ソリロキア』 同頁。
- (59) 『自由意志』 第1巻第6章, 訳書90頁。
- (60) 「いやしくも私たちが魂を全てのことの原因であると見なすべきならば、魂は、善いことと悪いこと、美しいことと醜いこと、正しいことと不正なこと、更には、全ての相反することの

原因である。動いているものには全て魂が宿っていて、これを統轄しているのだとすれば、魂は天をも統轄していると言わねばならない」。

「最善の魂が宇宙全体を配慮していて、そして今言わたったような知性が運動するのと同じような軌道にそって、その最善の魂が宇宙全体を導いているのだと言わなければなりません。逆にそれらのものの運行が気違いじみた無秩序な仕方で行なわれるとすれば、悪しき魂が導いていると言わねばならないでしょう」。(プラトン『法律』896E--897D, 訳書281-282頁)。

(61) 『告白』第7巻12章18。

(62) 彼がこの真理をどのように知るに至ったかについて、山田晶氏はその著『アウグスティヌスの根本問題』9「惡の存在」において、次のように述べている。

「彼がこの体験において、いわば神の立場においてのみ發言可能なく存在するものはすべて善い」という命題を認識したのはいかにしてであろうか。これに対してはおそらく次のように答えることができるであろう。アウグスティヌスの魂が瞬間に神とふれ合ったとき、そのふれあいにおいて神と魂との間に火花が飛んだのである。その火花の光において、彼の魂は、一瞬くらめく視野の中にこの真理を垣間見たのである、と。」

筆者には余りにミステリウムに傾きすぎた解釈のように思える。『告白録』第7巻第17章におけるアウグスティヌスの感情の高ぶりとそのすぐ後の意氣消沈との間には、一種異常とも思える体験があったかもしれないが、体験は、本質的に理論に還元されるべき問題を含んでいる。「存在するものはすべて善である」という命題は、確かに神においてのみ發言可能ではあるが、神の立場に立たなくとも吟味できる命題である。彼はその命題の意味と解釈に苦慮した。祈りを献げ、敬虔に神を求めた。それは、「万物は神より出で、神によって成り、神において存在する」<ロマ11. 36>に象徴される聖書の言葉の理性による解釈であって、決して体験ではない。もっともその知性も神が与えられたものではあるのだが。

(63) 善とは一般に欲望ないし意志の対象となるものを言う。ゆえに欲望の対象となるものならば、それが眞の意味で善であるか否かに関係なく、その限りにおいて善と言える<『トマス・アクィナス』世界の名著192頁、注1>。

(64) 『神学大全』<48問第1項>

(65) 善の不在は二つの意味に解される。一つは欠如的に解された場合、もう一つは否定的に解された場合、である。人間がかもしかの駿足や獅子の力強さを持たないがゆえに悪しきものと言われるのは、否定的意味合いでの善の不在であって、これは実際には何ら悪とは言われない。欠如的な善の不在とは、本来備えているべき善の欠如を意味する。例えば視力の欠如は盲目であるが、これは動物の場合に悪と言われる。意志になくても悪とは言われない。

(66) 『神学大全』<48門第1項>。

(67) 『眞の宗教』第3部18、訳書319頁。

(68) このによると次のからについては、『善の本性』第27章<訳書199-200頁>に次のような説明がなされている。「彼よりは彼からと同じ意味ではない。なぜなら、彼から存在するものは、彼により存在すると見えるが、彼により存在するものが全て彼から存在すると言うのは正しくないあらである。天と地は、神がそれを造ったので、彼により存在するが、神の実体かたではないので、彼から存在するのではない。例えば、ある人が子を生み、家を造った場合、子も彼

によって存在し、家も彼によって存在するが、子は彼から存在し、家は土と木から存在する。しかし、それは、彼が無から何かを造ることができない人間だからである。しかるに神は、万物がそれより出で、それによって成り、そのうちに存在するかたであり、自ら造ったのではない何らかの資料によって、自らの全能を助けてもらう必要はないのである」。

(69) プロクロスの『神学綱要』第2章「原因」<訳書452頁：世界の名著15>を参照。

これは、原因は結果より優れているという思想を生み出す契機にもなった。なぜ生み出すものが生み出されるものにより優れているのか。なぜに原因が結果より優れていなければならぬのか。そのような問いは彼らの脳裏には全く存在していない。従って被造物はそういう意味で、結果であって原因ではないのである。

(70) 『エンキリディオン』第1部第2章(10)，訳書205頁。

(71) 『自由意志』第2巻第3章，訳書77-78頁。

(72) 『告白』第7巻第16章には、こうある。

また私は、健康なくちに美味しいパンも不健康な口にはまずく、清らかにすんだ目に好ましい光も病んでいる目にはいとわしいということがあつても、これは何も驚くにはあたらないことを経験によって知りました。あなたの正義でさえも不義の人々には気にいらないのです。蝮や蛆虫が気にいらないのは当たり前のことです。しかしこれらのものをも、被造物の下位の部分に適合するかぎりにおいて、善いものとしてお造りになりました。不義の人々もまた、あなたに似ない者となればなるほど下位の部分に適合するようになりますが、逆にあなたに似た者となればなるほど上位の部分び適合するようになるのである。そこで私は、不義とは何かとたずねてみて、それが実在するものではなく、むしろ至高の実在である神、あなたからそむいて、もっとも低いものへと落ちてゆき、内なる自己を投げ捨てて、外部に向かってふくれあがってゆく転倒した意志にほかならない、ということを悟りました。

(73) 『真の宗教』第3部(38)，訳書321頁。

(74) 『二つの魂』第8章10，訳書30頁。

(75) 『善の本性』第15章，訳書188頁。

(76) 『エンキリディオン』第1部第2章5(14)，訳書209-210頁には、善と悪との共存について次のように説明されている。

「悪人とは悪い善なのである。とすれば、善と同時に悪も存在することになる。これはいかなる相反する二つのものも同時に内在することはないと論理法則を侵している。しかしあウグスティヌスはそれを認める。確かに空が明るいと同時に暗いことはありえないし、食物があまいと同時に苦いと言うこともない。ほとんどの事物がこの論理法則に従っている。しかし善と悪は同時に存在するだけでなく、悪は善なしには存在することができないし、また善の中以外には存在することができないのだと言う」。

(77) 『エンキリディオン』第1部4，訳書208頁。

(78) 『エンキリディオン』第1部第2章4・12，訳書207-208頁。

(79) 『真の宗教』第2部11(22)，訳書308頁。

(80) 『告白』第10巻第6章10，訳書336頁。

(81) 『エンキリディオン』第6部第1章3(96)，訳書298頁。

- (82) 『善の本性』第37章, 訳書307頁。
- (83) イザヤ45.7
- (84) 『基本書と呼ばれるニマの書簡への駁論』第38章44, 訳書167頁。
- (85) 『秩序』第1卷第2章, 訳書213－214頁。なおこの自己の内部への探究は, アウグスティヌス独自の記憶理論に至る。『告白』第10巻参照。
- (86) 『エンキリディオン』第1部第2章2 (11, 訳書205－206頁)。
- (87) 『真の宗教』第5部40 (76), 訳書363－364頁。
- (88) 『真の宗教』8 (15), 訳書302頁。
- (89) 『秩序』第2巻第4章12, 訳書271頁。
- (90) 『三位一体』第5巻, 第1章2, 訳書164頁。
- (91) 『告白』第7巻第11章, 訳書239頁。
- (92) 『ソリロキア』第1巻第4章, 訳書335頁。
- (93) 『ソリロキア』第1巻第1章, 訳書330－338頁。
- (94) Whitehead, *Process and Reality*, p.36.(corrected edition)
- (95) Charles Hartshorne, *Insight and Oversight of Great Thinkers*, p.8.を参照。
- (96) David Ray Griffin, *God, Power and Evil*, p.19.

[1998年11月30日受理]